001

増島六一郎

気高きバリスターの見果てぬ夢

出身地　滋賀県彦根市
生　年　一八五七（安政四）年六月十七日
没　年　一九四八（昭和二十三）年十一月十三日

一八人の創立者の中で、いちばん長生きしたのが、英吉利法律学校校長となった増島六一郎である。幕末に生まれた増島は、それから明治、大正、さらに戦後の昭和まで三つの時代を生き抜いた。増島家は、彦根藩で代々弓術師範を務めた家柄で、六一郎という名前は、父団右衛門が六十一歳の時に誕生したことに由来する。

藩校弘道館で神童の誉れ高かった増島は、明治維新後に上京し、開成学校から東京大学法学部へと進み、一八七九（明治十二）年首席で卒業し法学士となった。翌年の秋、「自分の必要とする人物は自分でつくる」という主義であった三菱の創業者岩崎弥太郎に見込まれて、イギリスの代表的な法曹院ミドルテンプルに留学するため、同期生の山下雄太郎と磯野計と共に横浜から旅立った。この留学には人選についてエピソードがあって、当初は増島と山下のほかに高橋一勝が選ばれていたが、高橋が辞退したため磯野に代わったという。高橋が留学していれば、増島とイギリスで机を並べたに相違なく、創立者の中にミドルテンプル出身者がもう一人増えていたかもしれない。

増島は、八一年一月ミドルテンプルに入学し、二年半の研鑽を経て八三年五月バリスター・アト・ロー（Barrister at Law）の称号を受け晴れて法廷弁護士となった。これは穂積陳重、岡村輝彦に続く快挙であった。彼はしばらく法律事務所で実務を学んだのち、八四年七月に帰国、その年の九月法学士の資格で代言免許を取って開業した。

「バリストル、法学士代言人」となった彼は、その後数々の訴訟に携わりながら、品格ある法律家の育成を目指して東京大学や明治義塾法律学校で教壇に立って法学教育に従事するようになる。後者には、増島のほか高橋一勝や自由民権家の馬場辰猪など多士済々の講師がいたが、学校経営は必ずしも順調ではなかったようで、廃校の憂き目に遭う。増島を英吉利法律学校設立に強く向かわせた背景の一つには、この明治義塾法律学校の廃止があった。

八五年四月、増島は明治義塾跡地と建物を三菱から購入し、他のメンバーと共に設立準備を進め、その年の九月に英吉利法律学校を開校した。弁護士としてタイム・イズ・マネーを地でいった彼は、事務所で受けた話についてその内容や親疎の別なく雑談に至るまで費やした時間を計算した請求書を相手に送りつけた逸話の持ち主であったが、増島はまた日本語よりも英語の方が達者で、米国公使や英国領事らを招いた開校式での挨拶も英語で行っている。

その晴れ舞台から五年半経った九一年四月、英吉利法律学校長を四年三ヵ月務め、八九年十月に校名が東京法学院と改まった後も引き続き院長の職にあった増島は、その座を突然去った。院長辞任の理由は、代言業が多忙をきわめたためそれに専念するというもので、学校経営から一切身を引く感があった。

だが、同年七月三十一日付「東京朝日新聞」の伝えるところによれば、増島は、東京法学院、東京文学院、東京医学院による学院連合構想が頓挫した後も、麻布材木町に構えた邸宅に東京法学院、東京英語学校、済生学舎、慶応義塾、共立学校、成立学舎、哲学館、郁文館、同志社、錦城学校等の代表者を一堂に集め、私立学校の大連合をなお夢見ていたのである。

増島六一郎

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。